

コロナ禍のオリンピックが問いかけるもの

—— 政治・資本・ジェンダー ——

井谷聡子（関西大学文学部・英米文化専修）

【スポーツとは何か】

「スポーツ」の語源（*諸説あり）

- ラテン語の“deportare”（デポルターレ）：de=英語の“away”、“portare”=“carry”
 - 「あるところから別の場所に運ぶ・移す・転換する・追放する」の意味が転じて「気分を転じさせる」「気を晴らす」といった精神的な移動や転換を表す。
- 中世フランス：“depoter（デポテア）”や“desporter（デスポッティ）”
 - 「気分を転じる・楽しませる・遊ぶ」 =>スポーツの元の意味は「気分転換」
- 近代英国：“disport（ディスポート）”や“sporte（スポーツ）”、“sport（スポーツウ）”
 - 19 世紀後半まで、貴族階級の遊びであった野外での「狩猟」を指す。

スポーツの 3 つの文化的源流：祭・見世物、軍事訓練、娯楽・遊び

- 近代スポーツ：英国のパブリックスクールにおいて発達。
 - 19 世紀半ばまでは主に グラマースクールとしてラテン語・ギリシャ語の教育を行っていたが、トーマス・アーノルドがラグビー校の校長を務めた時期（1828-1841 年）にスポーツがカリキュラムの一環として導入される。
 - 英国パブリックスクールの発達、支配階級の男子の教育の一環としてスポーツが普及（陸上や水泳、ラグビー、ヨット、ボクシング、テニス、バドミントンにフェンシングなど）→「真面目」な遊び、身体訓練としての色合いを強める
 - 学校対抗戦の増加、国内、国際競技団体の設立、統一されたルールの整備。
 - 例. 登山（1857 年）、陸上（1865 年）、ラグビー（1871 年）、テニス（1888 年）など
 - 1844 年：ジョージ・ウィリアムズ卿（ロンドン）により YMCA の設立
 - ビクトリア朝時代に発達した「筋肉的キリスト教」の影響を強く受け、心身の鍛錬を通じたキリスト教の実践を目指した。

【19-20 世紀のアメリカ社会とスポーツの広まり】

19 世紀半ばのアメリカ

- 娯楽としての大衆文化、パブリックスクールにおけるカリキュラムの両面において英国から持ち込まれ、アメリカ独自のスポーツへと発達。
- YMCA の広がり と YMCA 教育校としての大学の増加
 - 1891 年：ジェイムズ・ネイスミスによるバスケットボールの発明（後のスプリングフィールド大学）
 - セオドア・ルーズベルト 米国大統領（1901-1909 年）：「カウボーイ」、筋肉的キリスト教の価値観を強く体現、帝国主義者、米国森林局の設置と国立公園の設立。
 - 米国初のオリンピック（1904 年セントルイス大会）を招致
 - 帝国の拡大と植民地拡大を祝う万国博覧会の一部として実施

- 「人間動物園」や「アンソロポロジーデー」など人種差別的イベントと一体化

20世紀：アメリカ合衆国の経済的発展と「男らしさの鍛錬の場」としてのスポーツ

- 南北戦争（1861~1865年）を経て、産業資本主義と都市社会の拡大、娯楽としてのスポーツの拡大
- 社会の急激な変化と白人中流階級男性の「男らしさ」や地位没落への「不安」
 - 産業化・都市生活 → 身体的強さの重要性が低下
 - 移民の流入・奴隷の解放 → 白人支配の揺らぎ
 - 労働者運動 → ブルジョア支配への抵抗
 - 女性運動 → 男性支配の揺らぎ

=>鍛錬されたタフな肉体を通じて、アングロサクソンのエリート（異性愛の）男性による支配と男らしさの価値の維持、再生産を目指した。

【日本へのスポーツの伝播と広まり】

- スポーツと定義されないものの、身体を用いた「競争」や身体訓練、祭事、遊びや見世物は近代以前から欧米諸国以外の地域・文化に多様に存在。
 - 日本では、祭事、見世物としての相撲や綱引き、狩猟、武術などが「スポーツ」として組織化・ルールの整備が進む。
- 欧米型近代スポーツは、明治政府に招かれた「お抱え外国人教師」たちにより、学問と共に生活様式としてもたらされ、余暇の活用の一つ（趣味）として伝えられた。
- フレデリック・ウィリアム・ストレンジ：「日本の近代スポーツの父」
 - 1875（明治8）年：東京英語学校（現・東京大学）に教師として着任、英語と共に英国流のスポーツも教えた。パブリックスクールの名門イートン校で学んだジェントルマンとして、ボート、水泳、クリケット、フットボール、陸上競技などを指導。1883（明治16）年には東京大学で日本初の陸上競技大会を開催。
 - 東京大学をはじめ、日本の高等教育機関にも伝播。
 - 「スポーツにとって重要なことは勝敗ではなく、全力をつくすこと。スポーツの奥義は心身の鍛錬にある」→英国流のスポーツ精神の輸入。

*輸入されたスポーツは、語源に近い「楽しむ」ものよりも、「身体を鍛える」ことが主眼となり、欧米列強に並ぶための人材育成を目指した明治の三育（「知育」「徳育」「体育」）の重要な一要素として発達。スポーツは体育となり、軍隊と学校を揺りかごとして浸透、成長。

<メディアとスポーツ>

娯楽としてのスポーツの大衆化は、メディアと切り離せない関係にある。

- ラジオ放送、新聞報道を通じ、学生の領分だったスポーツが「観る」娯楽として大衆に発達→若者の間のスポーツ熱を加速
- スポンサーとしてのメディア：新聞各社がスポーツ大会を組織、選手の雇用も

<天皇家によるスポーツ推進>

19~20世紀：封建社会の終焉とブルジョア支配の拡大により、皇族・貴族の解体、求心力の低下が進行。日本の皇室にも危機感。スポーツを通じて皇室の人気向上を図ると共に国民の体力・体躯向上に努める。

- 「スポーツマン」皇太子裕仁 ↔ 「病弱」な大正天皇
第10回全日本選手権陸上大会（1922年）における令旨：
「運動競技が心身精神の陶冶に重大の関係あるは言ふを俟たず。近来此種の会合益々隆盛を致し多数の青年一場に会合し礼讓を重んじ氣節を尚び相和して技を競ふは喜ぶべきことなり」（坂上康博『権力装置としてのスポーツ』内引用、p.57）

【近代オリンピック】

「ムーブメント」としてオリンピック、オリンピック・ブランド

- 平和、友愛、多文化理解、国際主義（internationalism）、Excellence、フェアプレー参加することに意味がある。

<近代オリンピックとナショナリズム>

近代オリンピックは、その初期には万国博覧会の一部として開催。その内実は非常に植民地主義的であり、人種差別的。

- 多人種による徒競走（人種の優劣を見定める）
- 「優れた」西洋文明、西洋文化としてのスポーツの世界的普及
 - 特にクーベルタン伯爵は、五輪を通じてアフリカを文明化させるという意図を明確に書き残している。
 - 「国家の近代化の象徴」として五輪の開催が特に発展途上国で争われてきた。

- 1896年アテネ大会＝近代オリンピック第一回大会（*女子選手は出場できず）
- 1904年セントルイス大会＝初めてヨーロッパ外で開催（*万博内での開催）
- 1936年ベルリン大会（“Nazi Olympics”）「最も完成した近代五輪」
 - ヒトラーは当初反対（👮非白人選手とアーリア人を競わせる）
 - 人種・民族・国家を強く意識した儀式の導入：国旗掲揚、国歌斉唱、聖火リレー
 - ボイコットが広く呼び掛けられるが失敗→後のIOC会長、米国のブランデーがボイコットに強く反対。反対キャンペーンを「ユダヤ人共産主義者による陰謀」。
 - アーリア民族の優位性を示すはずが・・・アメリカの黒人ランナージェシー・オーウェンスがリレーもいれて4冠（走り幅跳びの2位は日本の田島直人）
=>それでもナチスのプロパガンダとして大成功した。

米国ホロコースト記念博物館のベルリン大会の展示には、「[ナチス] 政権は、大会を海外の観衆やジャーナリストたちに平和で寛容なドイツというイメージを植え付けるのに利用した」と書かれており、それは成功したと言える。

- 1964年東京大会：オーストラリアを除き、初の非欧米諸国による開催

小田実（64年大会を経験して）

「「国を護るか」——同じように、ほとんどすべて[の64年大会後の若者]がそれを自明のこととして答える。特攻隊のような行為によってさえ「国を護る」と答える若者も、半数はいる。しかし、それでいて、国の何を護るのか、何のために国を護るのか、という問いには明確な答はない（余談だが、こうした無責任なナショナリズムの高揚について、オリンピックは、やはり、大きな効果をはっきりしたと思う。そして、オリンピックが期待されたもう一つの効用、インターナショナリズムへの道はほとんど効果をあげていない。これは現場教師としての率直な感想である）（鵜飼哲『まつろわぬ者たちの祭り』内引用、p.200）

<「パンとサーカス」としてのオリンピック>

- 表面的な競馬、剣闘士などの見世物
 - ローマの円形競技場「シルクス(circus)」はサーカスの語源。
- 「パンとサーカス」：サーカスの裏の悪政を市民たちは見逃すだけでなく、「サーカス」をさせられる人々への暴力に加担。ローマ帝国の愚民政策。
- 近代五輪＝世界最大の「スペクタクルの政治」→ローマ帝国の呪われた遺産の継承か
 - これが顕著に現れたのはナチス五輪と呼ばれたベルリン大会と言われるが、社会で周縁化されたものに犠牲を強い、重要な政治問題、悪政から住民の目を逸らせるというスペクタクルの政治は、ベルリン大会以降もずっと継続されている。

<ジェントリフィケーションとメガ・イベント>

- 都市の再開発によりグローバルシティへと変化し、資本を呼び込みたいという思惑と、再開発による地価の高騰を見込む開発業者、地主、ゼネコンなど。
- 釜ヶ崎、「日本の4大寄せ場」
 - 元は1903年の内国勸業博覧会により生み出された。欧米と肩を並べる日本の近代化を誇示し、同時にアイヌモシリ、沖縄、朝鮮半島、台湾の生身の人々を展示した「人類館」も設置された。
 - 同時に長町の「ドヤ街」の存在は壁によって隠される(リオへの繋がり)
 - 植民地主義的眼差しと帝国主義的欲望
 - 開催後の開発により新世界や天王寺公園が作られ、日雇い労働者を中心とする貧困層は釜ヶ崎方面へと追いやられる。
 - 貧民の隠蔽と追い出し
 - メガイベントは、強制退去(行政代執行)など、平時であれば認められないような、民主主義的手続きのを作動させる最も強力な武器(オリンピック特例法)

【オリンピック問題の研究、反五輪運動】

ジュールズ・ボイコフ『祝賀資本主義』 80年代以降特に顕著なオリンピックの特徴

1. 「例外状態」の利用：特例法、民主主義的プロセスの軽視
2. 政治的経済的スペクタクルの創出：反対の声の封じ込め
3. 破られる約束(レガシー)：特に環境保護の約束！
4. 公と民の「パートナーシップ」：リスク、利益、犠牲の配分に大きな偏り
5. 公営住宅の取り壊し、強制立ち退き
6. セキュリティの強と社会の軍事化

オリンピック災害おことわり連絡会『東京五輪に反対する18(+2)の理由』

1. 膨れ上がる費用
2. 都市計画変更
3. 巨大イベントは利権の巣
4. 大会招致に多額のワイロ
5. 「暑さ対策」騒動にも「マネー五輪」の矛盾
6. ボランティア搾取の闇
7. 野宿者・生活者の排除
8. テロ対策→軍事化・安全保障化
9. 原発事故隠しの「復興五輪」
10. 自然破壊(アジアの森林伐採)
11. 労働者搾取
12. オリパラ教育(教育の乗っ取り)
13. ナショナリズム(天皇・日の丸・君が代)
14. 聖火リレー
15. パラリンピックと優生思想
16. ジェンダー問題
17. アスリートの権利、健康被害
18. クーベルタンとオリンピズム
19. 戦争とオリンピックはつきもの
20. 世界各都市で反オリンピック運動

【終わりに】

五輪の夢？夢の破壊？

- 「レガシー」が強調されるようになって以降、人々の希望や夢、願いを吸い上げて膨張し、それらを実際には潰す傾向がより顕著に。
 - 例. 「復興五輪」、「ジェンダー平等」、「多様性と包摂」、「先住民族の尊重と自決権」、「持続可能性」、「平和」 etc.
- 五輪は近代の帝国主義、植民地主義、資本主義の産物。
 - 優生思想、開発主義、永遠の拡大を志向、人間中心主義、持続不可能…
- 国際反五輪運動の盛り上がり

“Abolition NOT Reformation” “Olympics Kill the Poor” #NOlympics Anywhere

参考文献一覧

アジア女性資料センター（2021年12月）『f-visions』No.4「【特集】東京五輪は何をもたらしたのか～フェミニスト視点で振り返る」

オリンピック災害おことわり連絡会（2020）『東京五輪に反対する18の理由 改訂版』

鶴飼哲（2020年）『まつろわぬ者たちの祭り：日本方祝賀資本主義批判』インパクト出版会

坂上康博（1998年）『権力装置としてのスポーツ』講談社

ボイコフ, ジュールズ(著)、中島 由華 (訳) (2018年) 『オリンピック秘史: 120年の覇権と利権』早川書房

ボイコフ, ジュールズ (著)、井谷聡子・鶴飼哲・小笠原博毅 (監修) (2021年) 『オリンピック 反対する側の論理: 東京・パリ・ロスをつなぐ世界の反対運動』

新教出版出版部（2020年）『現代のバベルの塔 反オリンピック・反万博』新教出版

レンスキー ジェファーンソン, ヘレン (著) 井谷聡子・井谷恵子 (監訳) (2021年) 『オリンピックという名の虚構—政治・教育・ジェンダーの視点から』晃洋書房

Boykoff, Jules (2013). *Celebration Capitalism and the Olympic Games*. NY: Routledge.

Cahn, Susan, K. (2015). *Coming on Strong: Gender and Sexuality in Women's Sport*. Chicago: University of Illinois Press.

Kruger, Arnd & Murray, William (2003). *The Nazi Olympics: Sport, Politics, and Appeasement in the 1930s*. Urbana, Chicago, and Springfield: University of Illinois Press

Lenskyj Jefferson, Helen. (ed.) (2014). *The Palgrave Handbook of Olympic Studies*. London: Palgrave Macmillan

Zimbalist, Andrew (2015). *Circus Maximus: The Economic Gamble Behind Hosting the Olympics and the World Cup*. Washington D.C.: Brookings Institution Press.